

浄土

八月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別換米臨時誌第三五二号)
昭和三十八年七月二十五日 印刷 昭和三十八年八月一日發行



第二十九卷 第八号

法然上人鑽仰会

法然上人が現代においてになったら「選択本願念仏集」をこのようにおとぎになるであろう 念仏信仰の真髓を明らかにした全浄土宗徒必読の書

選 擇 集 私 解

大正大学教授 文博 竹中 信常 著

目 次

宗祖と共に
やすらげき旅路
念仏にすけささぬ
特急「こくらく」号
砂糖と塩
いつでもどこでも
ふり仰ぐ山の高さ
浄土への道
借金と念仏
サシミ念仏
一に一たす二
偏依法然
あとがき

発行人 法然上人鑽仰会
発行所 大 道 社

新書版
送料 価
料 価

一三〇頁
三〇〇円
三〇〇円

仏教保育テスト

め ぐ み

みほとけの三つのおしえ「三法印」を
美しい絵と さわやかな歌とを通じて
えがきだした待望の仏教保育書

指導 大正大学教授 文博 竹中 信常
画 井上 与志夫/萩原 弘志/野沢 知且
B5版・48ページ 定価 100円・千40円

目 次

おやくそく
はなまつり
こいのほり
おほ
おひが
じょうどうえ
ねはんえ
ひなまつり
みおしえ
保育テスト

発行所 東京都千代田区
飯田町1の21

大 道 社

TEL <332>5944
振替 東京 8247

浄土

八月号



浄土の法門をきき念仏の行をたつとも、信心いまだおこらざらん人は、ただねんごろに心をかけてつねに思惟し、また三宝にいのり申べきなり。

法然上人御法語

—◇目次◇—

表紙 円空作・十二神将像(愛知県・正覚寺蔵)

人生の重荷に圧され俯いて	(2)
極楽があるから	
生きてゆける	林 靈 法 (4)
表紙の説明	(7)
近代高僧伝 吉川大順	大 橋 俊 雄 (8)
私の念仏生活	阿 川 貫 達 (10)
インドの祖霊祭	春 日 井 真 也 (16)
ご法語をいただく	(21)
パーティの木陰にて	佐 藤 良 純 (22)
雑 感	(25)
心の鬼	(26)
一枚起請文について	村 瀬 秀 雄 (28)
編集後記	(33)



人生の重荷に圧され俯いて

人生の重荷に圧され俯いて

暗い淋しい小路を辿ってゆく。

その人生の意味するものは喜びではない。

つらい厳しい苦しみだった。

その人間には

束の間の気休めほどの光さえ、

頭脳から心臓からも閃いては来なかった。

そのあげく快楽と苦痛とのあいだ

生と死とのあいだ、

悪しきものと善との間に

一線を画するしるしさえ、ほとんど

視野から掻き消されてしまった。



ところがある夜、幸いにも

かすかながら美しい一条の光明ひかりがさしてくるのを見た。

それが何であるか、

どこからさして来たのか、

皆目わからなかったけれど、

それを仏と呼んで礼拝した。

まったく思いがけなかった希望というものがやってきて

彼の全身全霊に満ちわたった。

そして人生は彼にとって

かつて夢みることできた以上のものを意味し彼の一切を覆うた。

いや、彼の世界をこえたところまで

覗きこんだのだった。

賢い人々は目くばせして微笑した。

そしてそれを「迷信」と呼んだ。

しかし彼はその力と平和とをじかに感じていたので、

おとなしく言い返した。

「おお！ 幸いなるかな迷信よ！」

（スワミ・ヴィヴェカーナンド詩集より）

極樂があるから生きてゆける

林 靈 法

(東海高校々長
名古屋・養林寺住職)



—

極樂という言葉ほど現代の人々にとって不可解な言葉はないだろう。だから仏教側にとっても、この極樂を現代的に解釈するとか、あるいは、これを現実的なこの地上に実現すべきものとするなどの、いろいろと時代相応の苦慮をはらってきた。しかし、極樂を説かぬ宗教はあり得ないのだし、極樂を説かずしては現実の人生というものは現われて来ないものである。問題は、仏教に説く極樂というものの本当の味わい方が現代にできているかということである。

法然上人の出現の意味はまさにここにあったのだ。法然上人までの極樂、即ち浄土のうけとり方というものは、本

当のものではなかった。結論的に言えば、この世の地上的生活をそのまま延長した一線上に極樂というものを引き出して考えていた。平安朝時代における極樂への憧れというのは、日本の上下を風靡していたし、その場合の極樂のうけとり方は、まさにこの地上での人間的欲望の対象化されたものであった。この物質的、享樂的な表現をもった極樂へ往生せんと強く願がったのである。それに対して法然上人の往生浄土教の精神は、そうして功利的なこの地上と同じ次元に構想された卑俗的な極樂思想をぶち破って、真に人生社会を指導し、宇宙を浄化してゆく原動力としての極樂を体験され、これをはっきりと示されたのである。

二

普通、浄土教は彼岸主義であり、現実否定の宗教であると言われている。しかし、極楽というものが彼岸になくてどうしてこの地上を指導することが出来ようか。

問題は極楽というものをどの次元においてうけとるかということである。

もともと極楽という世界は、この地上の次元とは異なる高次の立場にあるものである。これを発見されて確立したところに法然浄土教の劃期的な意義がある。先にのべた如く、従来の浄土思想が、極楽世界を物質的、感覚的、享樂的にえがき出して、この世と同一次元の線上にえがき出すから、極楽という世界は死後においてのみ始めて到達が出来るということになる。しかも、平安末期の戦乱と天変とに追いまくられた民衆は、この世的なものに對する希望を失い、すみやかにあの世の極楽への期待に生きていった。こうした極楽というものの感覚的なうけとり方と、時代の背景とによって、全く現実否定の、いわゆる一方的な彼岸主義というものに墮していったのである。ところが、法然浄土教では、極楽というものは、どこまでもこの地上生活と同一次元のところに求められたのではなく、高次の次元にある絶対の世界を表現されたものである。従って死後においてのみ、始めて感覚的、物質的要求の満足せられると

いう憧憬の世界ではない。極楽は高次の絶対の世界であればこそ、地上のいわば相対的な人間生活の、いつでも、どこでも念仏を通して、そこに実現し来たり、只今の人生社会のすべてにわたってこれを浄化発展しゆく源動力となつたのである。死後に始めて味わわれる世界ではなく、只今ここで、極楽からの廻向の大きな力をしっかりとうけとることが出来るのである。だから私たちは極楽があればこそ、始めて真剣に、しかも感動をもって日日の生活を安じて生ききつてゆくことが出来るのである。法然浄土教の劃期的な意義がここにあるといえる。

三

更に、この地上の生活を終えるとき、私たちは今こそ完全に眞実の命の世界である極楽に迎えとられる。いうまでもなく、これは単なる虚無の世界に消え去るのではなく、天地社会を無限にわたって向上進化せしめてゆく眞実の命の世界、即ち極楽の大活動に生きてゆくのである。この意義を味わってくると、私たちの死の意味は大いなる凱旋式とさえいうことができる。いまや弥陀の眞実生命と一つになつて還相の大活動をさせていただき、この人間社会、天地自然の浄化発展という聖業に加わり、大活躍をさせてい

ただくのである。これが真実の意味における極楽往生の意味である。

法然上人以前の極楽観は、こうした大活動に生きてゆくのではなく、極楽を物質的、感覚的にえがき出して、そこに楽隠居をするような気持で極楽に憧れていった。極楽は仏教の本筋からいって、般若の絶対の世界を具象化したというところからわかるように、人生社会の永遠に発展やまざる進歩の大世界をいったものである。曇鸞大師も極楽へ行つて、いわゆる楽でもしようと思つたら大間違いであると仰せられているのがそれである。

以上の如く、私たちはそうした絶対の極楽世界があればこそ只今、この地上生活に安心しきつて、そのお育てをうけながら力いっぱい生きてゆける。しかも、この地上の命終つて、こんどはそれこそ永遠の宇宙人生の浄化発展のために大活動をさせていただく。この現当二世にわたる力強い信仰が、法然上人の極楽感から生まれるところのものである。

なお、地獄についてのお尋ねもあったが、これは俱舍論や往生要集などにその悲惨な情況が画かれてある。そういったものが具象的にどこそこにあるというものではない。物質の享楽と利己主義とに追いまくられて、愛憎無限の地

上生活を送つたものが、いよいよ命終るにのぞんで、ゆき先まっくらの奈落のどん底につき落ちようとする。その悲惨な心理を思えば、地獄の存在とその様相はよくわかる。現代の世相はまさに地獄ゆきの世相である。現代人のこの淋しい魂に向つて、人生のよりどころである極楽の本当の姿と真実の力とを示すことが、絶対に必要であるだろう。

内 山 憲 尚 著 児童教化概論

上B 価 6 製
二ケ 二 包
八 一 八
ス 〇 〇
付 付 費

人間形成の基といわれる幼児児童対策をいかにしたらよいか。人づくりのために、児童施設や環境の整備をいかにすべきか、を教えるのが本書である。

現代の般若心経

谷 英 賢 著 発 売 中
B 価 6 三 二 四 六
〇 〇 二 〇 〇
円 円 円 円

いままでの心経講話と違い、例話が多くわかりやすい、これまでの抹香臭い話し方ではなく、般若心経とはこんなものかとなじむところにこの本の特色がある。

東京都千代田区神田佐久間町二ノ十一
株式会社 隆 文 館

振替 東京 一五三一〇二番

表紙の写真

円空作十二神将像(愛知県 正覚寺蔵)

「その後の円空彫刻展」なるものが鎌倉で開かれたので、ほんとうに取るものも取りあえず出かけて驚いた。前回開かれた時は押すな押すな円空ブームを捲き起こしたこの美術館が、ヒッソリカンとして私たち家族以外にはたった一人の専門家の卵らしいひとが、熱心にデッサンしているだけであつた。あまりの急変にただただあきれたが、と同時に心ゆくばかり円空仏が拝めたのは、まことに幸いと、何を喜んでよいのか分らない有様であつた。マス・コミの偉大さをこの眼で確かめ、ブームの去った後のむなしさを改めて考えなおしてみた。私はかつてこの誌上(昭和三十六年十二月号)で円空仏を紹介したことがあるので、再び同じことを繰り返すことを避け、思いつくままに記してみた。

ある同人の彫刻展を観て、有名な彫刻家がいづれと違つた作品を出しているの、その真偽を確かめたことがある。その答えは売り物だからというのであつた。一般の人は芸術品を好まない。未完成に見える作品よりもきれ

いになぞつた人形風の作品を好み、場合には手を入れて直してくれとさえ申し込みがあるという。この話は痛く私の心を捉えた。相手の要求に応じて芸術をまげなければ、生活できない彫刻家。相手の知能をよいことにして宗教性の本質を身近かに引下げ、小さなスケールの仏教で満足している仏教者。かりにこう言えるなら、やはり大きな反省が加えられなければなるまい。仏陀の教えを分りやすく説き示すことと、低俗に引き下げて説明することとは似てはいても全く相い容れることのできないものである。

円空は仏像を刻むことに一生を托してはいけるけれども、村人たちから絶大な尊敬を受けていたればこそ、未完成に見える仏像が、村人には有難い円空様の仏として、すなおに受けいれられ、三百年の間香煙にくすんで、円空の精神が今日まで花開いていることを知るのである。それを思う時、宗教と芸術とが全く一つに融け合つた世界が円空の精神であつたと言える。また、材質を好まず、どんなものでも手当り次第に刻みつけ「木っ葉さま」なる仏像ができ上ることすら、材質を選び、

多くの道具を使って仕上げる現代の彫刻家にはよい反省の資料とさえなっている。

橋を作り、医療を施し、悩める農民の声を聞き、ともに悩み、ともに涙した円空の仏像は常に農民とともに生き続けている。仏像のモデルは鼻の大きい、健康な顔つきが特色で、中央の都の仏師の手によってできた、とりすました端麗な顔ではない。老婆の愚痴を聞き、家庭の生活のなかにまで入って他人に明かすことのできない言葉を数多く聞いたことでもあらう。しかも、円空は一所に住むことなく、滋賀の東から三重を南端として、江戸時代に北海道まで渡り、転々としながら、仏像を残し、その芸術性が今の時代になつて見直され、開花している。だから見捨てられていたというのではない。香煙で真黒くすんだみ仏を見ると長い間、いかに大切に尊崇されてきたかがわかる。生きた仏教のありかたが端的に示されていて、頭のさがる思いがするのには私だけではあるまい。

光りカガヤク掌ニ金ノ仏ゾオハスナレ。
光りカガヤク掌ニハット思ヘバ仏ナシ。

(白秋)

石上善応



近代高僧伝

吉川大順

大橋俊雄

日本の近代化はヨーロッパ各国のアジア進出によつてはじめられた。ペリーの来航をまたないでも、異国船は近海を訪ずれ、国内でもマニユファクチュアは不十分ながら芽ばえ、一方全国各地は飢饉の波におそわれて、不安な状況におびえつつあった。天保初年はこのような意味で、封建制のささえが次第にゆらぎ、近代化への歩みを進めるに一つの時期を画したといつてもよいであらう。このような時代環境の中に大順は天保三年十一月十八日、風光明媚な瀬戸の内海をのぞむ播州明石の町に生れた。父は清兵衛といひ、彼には七人の子があり、大順はその末子であつた。

我子のうちせめて一人位は出家させたいものと心ひそかに思つてゐた父の願ひは大順の出家によつてかなえられ、十一歳の時尼ヶ崎如来院の航誓根随のもとに弟子入りし、後成道寺の知成について得度した。名を大順と改めたのはこの時で、この人こそ「東に良慶、西に戒誓」といわれた徳僧戒誓上人の前生であつた。

弘化四年増上寺塔頭最勝院に住してゐた叔父卓善をたずねて出府し、生死の一大事を知ろうとする一念から、宗余乗の法を求めたけれども、遂にめぐりあえないままに無為に二たとせをここで過し、更に上洛して醍醐西方

寺に留錫したが、ここでの学道精進の生活は半ば行乞にも等しい苦難の連続であつた。當時知恩院山内入信院には宗学の泰斗義嶺がおり、彼のもとに毎日二里の道をいとわず通いつづけ、研鑽にいそしむとはいふものの、生活の資は専ら行乞に仰ぐという有様。ここでの在住時どんなにか苦勞を重ねられたかといふことは、後に屢々「我幸いにして学成り人師となつたあかつきには、恰好の道場を開き、学徒をして衣食の事を顧慮せしむることなしに、安んじて學業にいそしむことのできるような方策をめぐらしたい」と語つてゐた一事によつても知ることができであらう。その後安政四年三月には大島宝樹院に住し、更に明治六年二月には神戸藤之寺から上本町西光寺に転じ、同十四年には招かれて佐太来迎寺の法主となつた。しかし居ること二年、十六年四月には寺を辭し、一切の俗縁を断ち念仏三昧に入らんと、法然上人の旧蹟勝尾寺を訪ねて山に入つた。そして山また山の幽邃の地に、やっと身を入るにたるような小庵を建て、ここを浄土に念仏を続けた。念仏行を修することこそ、彼の生涯を阿弥陀仏に捧

げようとする心からなる意願であり、学解の總決算を志して入山したため、彼の所持していた一切の典籍は来迎寺にとどめておいた。

「書を読んで書にひきいられることなく、又法を聞いて法にとどこうるこのないのが学問する者の本義である。故に我に於ては既に手にした全ての書籍を放下して、今後友とする要はない」学問は書籍にのみたよつていてはならないことだ。念仏は学問のたすけによつて解することはできても、本当にこの身をまかせて阿弥陀仏に捧げるには学解によることなく、心から念仏をとえなければと、強く心に誓つて入山した彼であつたが、其の学徳を慕う人達のために止むなく、不本意ながら講義はつづけられたという。

しかし大順はどちらかといえば学者ではなく、徳者であり、福田行誠には深く私淑していた。反面行誠また大順に傾投していたといつてもよい程、二人は心をわつて話あえる仲で、曾つて行誠が知恩院に晋山したとき大順は早速にお祝を申述べるべく登嶺した。「戒誓さんなあ、こん度はこんな窠窟へ入つてしまつてな、伊藤（博文）さんが知恩院住職を

願わなと治らんからというて、餞別を出されたから致し方なく、こんな豚箱に入りまして」これが対面した時の行誠の言葉であり、行誠にしてみれば門主などというものは迷惑の上もないという様子、「水は方円の器にしたがうということですから」「まあそんなものかい」これが当時かわされた言葉だという。彼または山下現有とも親交を重ねていた。明治二十八年知恩院は野上運海が寂し、その後任に大順と現有が推された。時に兩人は互にゆずりあわれ、結局現有が七十九世の法燈をついだけれども、世の名声はどちらともつかない有様であつた。そのように宗内の名だたる人達と交はり結びはしたが、彼の許に集まつたのは浄土宗の人というよりも禪宗の人が割合多く、中には婦人もおれば外国人ですら講席に侍つたことがある。アメリカ宣教師ヘール博士は俱舍論や十善法語を聴聞し、その講義をきいて感心した。「とかく仏教といへば葬式にのみおわれ、深い教理はあつても生きていない。死せる仏教であり、生彩に欠けているが、キリスト教は何と現代人をひきつける力があることか、仏教は今や天

下の用をなすものではない。それなのに今孝師の教を聞いて仏法の甚深の法であることを知らせていただき、且つ老師の御修行のさまをまざまざと見せて戴き、ただただ恐れ入りました。この上は仏教信者となりたい。しかしこれが若し故国の人の耳に入つたならば給金の道はとだえてしまふでしょう。従つて入門することはできないが、心は表面的には牧師をよそおい仏教を学び、十善法語を故国に弘めたいと思います」と語つたというが、これも一重に彼の徳行に帰しての故であつた。慈雲尊者の十善法語を講ずるようになったのは二十四年十月大阪の利見又兵衛の求めに應じてからであつたが、その前後を通じ師のもとに集まる人は總じて八百五十余人、時人呼んで「明治大正の慈雲尊者」とあがめ、又「今釈迦」と尊ばれた高僧であつたが、四十三年十月老いの身を慧光院に移し、ここに居ること十一年、大正十年九月二十三日高座にのほり十念をとえ端座のまま九十歳を一期に遷化せられた。

法名を善蓮社戒普上人性阿無作大順大和尚という。

阿川貫達

私の念仏生活

(前大正大学教授
東京・浄土寺住職)

(1) 出家より青年時代

浄土編集部より私の念仏生活と題し投稿を望まれたので、些か私個人の念仏生活を述べようと思う。広く一般念仏生活は斯くなるべきものと云うのではなく、全く私自身の生活の中にどんなに念仏を考えどんなに是を実践して居るかを述べたいと思う。

私は横浜の相当な米穀商の一人息子であつたが父なる人の不心得から世縁拙くして一家離散して、八才の時弊師阿川貫珠上人(独身者八王子極楽寺住職)に養子弟子となつた。弟子入りしすぐ經典を教えられ勤行に出され念仏を称えることを教えられた。仏様にお事への厳格なしつけの中に念仏を称えること、本尊様は齒吹阿弥陀如来と云われる生き仏様にましまし、御心に叶った時には開口して齒を露出して喜びの姿を示されると云う、あら

たかな御仏である生き仏様であると教えられた。庭の草取りに念仏を称えながら、虫を殺すなど云われた。昔ながらの勧善懲惡を話され陰徳を積むことを教えられた。十才の時小学三年級に編入試験を受けて入学、爾来小学校高等小学校まで極めて順調に卒業させていただき仏様へ御礼のお念仏をとなえた。芝中学の前身浄土宗第一教校二年に是亦編入試験を受けて入学許可された。小田原の小島密成師、早く物故された幡随院の伊達保美師の三人何れも編入試験で合格した。芝中三四五年此時代も念仏をとなえたが、学問の成就するよう願つたので極楽往生を願う事はしけれどもそんなに熱烈なものではない。若い時は仕方ないもので今から思えばおぼつかしい

(2) 加行中の念仏

二十才芝中第三回の卒業、幸にも首席であ

りましたので、本尊前に厚く御礼を申し上げ力をありがたく感じました。だんだん念仏のありがたさが身にしみて解るようになりました。同年秋増上寺で加行を受け堀尾貫務大僧正の伝灯師中島観瑠師(後百万遍知恩寺法主)の教誡を受けた。殊に堀尾大僧正はそのお姿を拝するだけで、何かがたく涙がはふり落つるのを禁じ得ない。その伝灯の御言葉に打たれて嗚咽低頭するのみである。又毎日懺悔、滅罪の礼拝中に我身の罪惡の深いのに感じ、拝する阿弥陀仏のありがたさになきながら礼拝することもあった。ここに自分の信仰に一転機を来したと思つた。話はあるが私はこ二十数年増上寺の加行に教誡師として随喜して居るが行僧を教誡して、どうかまだ信仰を得ざる人は早く入信し、既に入信の人には尚熱鉄の如き信仰となつて貰いたい。そのあかあかと熱した信仰を以て、未信の人に接して同信同行たるようすすめてもらいたいと念願する。

加行の日課の誓約には三百遍を誓つた。加行掛りからはなんでも沢山誓うよう、もし多忙で出来ない時は珠数をぐるぐる廻しただけ

て約束の念仏を申した事になると易行の念仏をすめられたが、私は一称一願の念仏でなければ相済まぬと思い精進に念仏申す意味で、三百遍ならば仏様にもうそつかないですむと思ったのであった此の別行の時の日課誓約三百遍は畏友伊達保美師と小生と二人だけであったが、加行掛りからお叱りもなかった。加行成満後は毎日少くとも三百遍は必ず仏前で称えた。もとより宗義では行住坐臥を問わない念仏なのだが、この当時は仏前で称えるものでなければ通じないような気持ちで正直につとめた。それ以上に称えて居た。

(3) 宗教大学時代の念仏

その後宗教大学に宗乗学を学び殊に本科卒業前二年間加藤秀旭師の授業を受けて念仏を称えることにつき懇々と説き明かされ、一層念仏の尊さを味うに至った。私は小石川坂下町の畑中に師匠より戴た金学校よりの特待生としての補助等の金で一軒家を立て自炊生活をして通学した。床の間に六字名号の幅をかけ朝夕勤行をした。大学まで徒歩往復一時間を要した。この間珠数を放さず念仏称えて通学した。講堂本尊前の朝礼には初めより出席

して欠席遅刻しなかった。お勤めは一紙小消息をよみ念仏教百遍をとなえた。三百遍の日課はこのおつとめで果した。その他の念仏はお約束以上の余分である。心ゆたかなありがたい生活をさせていた。純真なありがたい生活であった。この自炊生活の家へ先日まで増上寺執事長であった横内淨音物故された親友松村順堂君と夕食を共にし、学問上の話学生間の話など興深く打とけて話した。

恩師加藤秀旭先生は学生より極楽浄土阿弥陀仏の存在等について無遠慮の質問があると云い、お前達は何もわからなくて困る。学校出たら三年間毎日二万遍の念仏を称え、それから出なおしてこいと云われた。是は先生の体験から割出した注文であろう、誰れでも真剣に日課二万遍を三年続ければ疑問などなくなる唯歓喜踊躍の生活がなし得られると思う。

この坂下町の生活は真面目にやった遊びに行くとか浪費するとかはしなかった。いつも阿弥陀如来随逐影護して我を見給うと思つた。宗教大学卒業もありがたい事に最高の榮譽をいただいたが賞証は皆戦災で焼亡した。

(4) 軍隊生活と念仏

宗教大学卒業の年一年志願兵(幹部候補生)として一年間軍隊生活をした。此の生活は随分いやであった。することなすこと如何にして一人も多く敵を殺すかである。幼少の時より此時まで慈悲忍辱の生活で殺生は重罪の第一とされたものが急転して見聞動作皆殺人である。実にいやな思いがした。私はひまある時は念仏を心念して居た。口称は許されないものである。一年後軍曹と云う下士官勤務の三カ月は、可なり自由であり殊に二年後亦三カ月の勤務の時は見習士官として、将校と同じであるのと今の浄土寺より通勤出来たので、甚だ自由であった。此の時は珠数をポケットに入れて余暇には珠数つまぐり念仏唱えた。此の兵役は麻布歩兵一聯隊で現今の防衛庁である。入営の時白衣黒染の衣に袈裟をかけて入営したので、坊さん志願兵とあだ名された。私が軍隊にまでなぜ珠数を用いるかと云うと、念仏を称えるのに必ずしも珠数を要しないのであるが、然し珠数を手にはめて居ると、つねに念仏を思い出して称えることになる。故に法然上人も念仏の時には目をふさぎ手に珠数をかけてとなえよと云われた。鎌倉

二位の禪尼へ（源頼朝の宅）進ずる御返事に、意には本願をたのみ口には名号をとえ、手には珠数を取り、つねにかくるが、きわめたる決定往生の業にて候也と云われた。

(6) 行住坐臥を問わない念仏

念仏を称えるには別にやかましい条件はない。行住坐臥を問わずイットコデでも称えるのである。行とは歩行して居る時、住はとど

まって静にして居る時、坐はすわって居る

時、臥は横臥して居る時、起居動作の何れの場合を問わず念仏するのである。寺院の本堂

仏壇の前でなければならぬとは限らない。い

つどこでも念仏を称えれば阿弥陀仏は、念

仏の声に応じて現れ給う。是を善導大師は応

声御現（觀經疏定善義）と云われた。御仏は

普通には肉眼で見奉ることは出来ないが、心

眼を開けば即信仰生活に入れば是を味い知り奉ることが出来る。肉眼に見えないからとて

空無のものではない。いつでもどこにもありますのである。ただこちらに是を捉らえ奉る信仰がなければいけないのである。法然上人のある人に示す御言葉に阿弥陀仏すでに本願を成就し極楽世界を莊嚴したてて御目をみめ

くらしわがなをとふる人やあると御らんじ、御みみをかたふけてわがなを称する者やあると、よるひるきこしめさるるなり。されば一称も一念も阿弥陀仏にしたられまいらせずという事なし。されば摂取の光明はわが身をすて給う事なく、臨終の来迎はむなしき事なき也と云われた。真に生ける御仏を描出して余りない尊い事である。

(6) 無為無聊のない念仏生活

私は電車の中自動車の中でも念仏して居る。種々の会合に待つ時間には、いつでも念

仏して居る。種々の人と談笑して無駄の時間を過ぎない。それでは人と交りが円滑ではな

いかも知れないが、自分は常に念仏して居るのである。阿弥陀様と御一所の樂がある。さ

れば無駄な時間を費すことはない。寝る時も必ず珠数を持ち、眼さめた時は念仏すると自

然に又安らかに睡らせていただく、ここにも阿弥陀様がよきように御守護下さる尊さを味

わさせていただくのである。別に睡眠薬など用いず睡りにつき、朝の五時前起床（夏冬とも）五時に勤行して檀信恩人知己先亡の回向

念仏して八時に終り。朝食してその日の用事を弁する。夕方復勤行して檀信徒亡霊位の回向して念仏するのである。私の生活を知るものはそんなにしたのでは勉強が出来ないではないかと云うが、私は學問も尊いが、念仏することの方が尚尊いと自ら満足して居る。

阿弥陀如来について法然上人は逆修説法の御意によれば、阿弥陀如来は無貪の善根功德によって得られたる清浄光を放つては、淫貪財貪の二貪の不浄を除きて清浄の人となし、

無瞋の善根功德によって得られたる歡喜光を放つては瞋恚の罪も滅して無瞋忍辱の人となし、

又無痴の善根によって得られたる智慧光を放つては所等が愚痴の罪障を滅して智者と

異なる所がない。まことに清浄光によって我等の心無貪にして清く美しく、歡喜光によって

は我等の心無瞋にしてなごやかにゆたかに智慧光によつては我等の心無痴にして正しく明

朗を覺える。又無量壽經四髻偈には三垢貪り怒り愚かの冥を消除すと云い、又三垢消滅身

意柔軟にして善心生ずと云う、みな念仏の功德である。又四髻の偈に普く大施主と為つて諸の貧苦を救うと云われた。貧苦には精神

的と物質的食とあるが、精神的の食は清浄光

を弁する。夕方復勤行して檀信徒亡霊位の回向して念仏するのである。私の生活を知るものはそんなにしたのでは勉強が出来ないではないかと云うが、私は學問も尊いが、念仏することの方が尚尊いと自ら満足して居る。

阿弥陀如来について法然上人は逆修説法の御意によれば、阿弥陀如来は無貪の善根功德によって得られたる清浄光を放つては、淫貪財貪の二貪の不浄を除きて清浄の人となし、無瞋の善根功德によって得られたる歡喜光を放つては瞋恚の罪も滅して無瞋忍辱の人となし、又無痴の善根によって得られたる智慧光を放つては所等が愚痴の罪障を滅して智者と異なる所がない。まことに清浄光によって我等の心無貪にして清く美しく、歡喜光によっては我等の心無瞋にしてなごやかにゆたかに智慧光によつては我等の心無痴にして正しく明朗を覺える。又無量壽經四髻偈には三垢貪り怒り愚かの冥を消除すと云い、又三垢消滅身意柔軟にして善心生ずと云う、みな念仏の功德である。又四髻の偈に普く大施主と為つて諸の貧苦を救うと云われた。貧苦には精神的と物質的食とあるが、精神的の食は清浄光

等の三光によって救われ、物質的貧乏は亦現実的に富を与え給うを体験した。かくの如く心的貧乏を救済し給う時、御伝二十一の御言葉に「生けらば念仏の功つもあり、死ならば浄土にまいりなるともかくても此身には思ひわずらうことぞなき」安泰歡喜清浄の念仏生活が出来るのである。

(7) 生きものを殺さぬ生活

このようにして念仏生活をして欲ばかりでなく、怒りんぼうでなく、わからずやでなく、此の世を渡るとき、まづまづ隠やかに世をすごされる。私は勝負事はきらいである。囲碁将棋を手にしない。相撲の勝負を新聞ラジオ等で見聞しない。勝つ人は得意であるが、負けた人の気持ちを思えば羨しみでもない。すべての勝負はしないのである。

拙寺では虫を殺さぬ蚊や蠅は団扇で払い蚤も外に放つてつぶさない。沙丁魚のみやげに貰った貝は悉く海に放つ。鼠が出て困るので鼠取りで捕えても近くの野原へ放つて殺さない。寺内の人達によく守ってくれる。是も念仏の功德でありがたいことと思う。

(8) 毀誉褒貶いつも念仏

私のようなものでも人より責められめられたりすることもある。その時は是れ皆阿彌陀如来の御守護のおかげとありがたくいただく。本尊前にありがさの御礼の念仏をする。又時には侮蔑される事悪口を聞くこともある。その時は我身の罪障の深きを反省し善導大師の言われた、曠劫より此方生死流転して出離の縁なきもの罪惡深重のもので、宿業の然らしむる所と存じ、此の罪惡觀に立つて、心からなる誠をささげて懺悔文をとなえ念仏する時、このような宿業深重のものも、弥陀如来は是を許し是を守護し給うと思えば、唯ありがたさに涙こぼれるのである。たとえ世人は如何様に誹謗しようとも悪口雑言さるるとも、我心を知り給う御仏のありがたさよと思ふとき念仏せざるを得ない。我心のより所支柱に在す。拙寺奉安の本尊前は相好円満のいと尊き御仏にましますと、真心をささげありがたうおつかえするのである。

(9) 本尊前のありがたさ

私の寺の本尊前は戦災にお体は焼けたが幸にもお首と両手が残された。一昨年本堂復興の時復元し奉って、御安置申上げによき御相

好のありがたき御仏にまします。此の御顔を拝し念仏する時玉眼をしばだき我が称うる念仏を御嘉納あらせらるるかと思われるのである。指方立相のありがさをつくづく感ずるのである。世に指方立相をナンセンスなど云う人あらば、それはまことにお気の毒な人と思う。例えば遠方に居られる親兄弟に一見会たいと熱望して、ようやくあう事が出来ればそれで満足出来るであらう。会はなくとも遠方に居る人とその心は通ずるけれども、目前に会えばそれで十分満足すると同様である。我が御堂安置の御本尊は生ける御仏にましますと思念して真仏につかえ奉る思いである。

(10) 臨終来迎の念仏

今の若き人々は臨終に阿彌陀如来が来迎引接されることはないなど云うが、是亦信仰なく経験に乏しく体験持たぬ人の云う事である。私は是ありと信ずる。私が臨終の死の水を取つてあげた、弊師貴珠上人、浄土寺先代の室で母として事えた金池すえ子氏何れも臨終行儀中に念仏を称え、いと静に正念往生を遂げられた。尤近一昨年極月三十日死亡の実母の如きは、九十二才を以て臥床すること四

日ばかりで、下の世話にもならず。皆のものに礼をのべて終りですからお念仏しましょうと云い、死亡数時間前やをら上半身を起すようにし来迎図を指し何か言われた。もうロレツも廻らないので、分明でないが恐くは阿ミダ様のおわかをいただいたと言うのだらうと思う。暫くして私等一同念仏中にこときれ、まことにありがいた正念往生であつた。

来迎は行者自身見奉るもので第三者には明白にはわからぬのである。病人は見奉つて安祥として逝くのである。その時の情景によって正念往生と知れるのである。普通は臨終に三種の愛心が起ると云う。それは自体愛として我身を受する、境界愛として我周囲の財産地位名譽妻子眷屬等を受する。当生愛として次の生所に対する愛心、等が交々起つて心錯乱する。此時仏の来迎によって、心静まり安祥として極楽往生するを言うので、是を来迎の上の正念と云い阿弥陀經に説く往生是である。

00 人畜共に念仏生活

それは拙寺にクロと云う犬が居つた。十年前何れからともなくまぐれきて居つてしまつた。小柄な然し均整のとれた賢そうな犬で

あつた。此の犬が拙寺で毎朝五時に装束大鼓と半鐘を叩いて朝の勤行となる。此の半鐘を叩く時称える鳴鐘の偈に、願諸賢聖同入道場（願くは諸の賢聖同く道場に入り給え）願諸惡趣俱時離苦（願くは諸の惡趣即地獄餓鬼畜生須羅等の惡世界のものども同時に苦痛を離れよ）と称えて半鐘を叩くと、クロも鐘聲に呼応して仮本堂の正面階段に正坐して遠吠えするのを見た隣人がお寺でこのように仕込んだのかと聞かれて、私は初めてそのことを知り驚いた。近所に犬は何匹も居るが此の鐘の音を聞いても吠えないのにクロだけは吠える。此のクロは浄土寺の仏縁にあつたのであると思うが、此偈文の真实性を知るに足ると思う。平生私はクロに如是畜生發菩提心と云うて念仏を称え授けて居る。この犬は聞名往生すると思う。聞名往生と云うのは南無阿弥陀仏の名号を聞けば（随つて称え）弥陀の本願により極楽浄土に往生する意である。無量壽經に説かれた尊い事である。最近病氣で死んだので半鐘の音のよく聞える所に埋葬した。極楽往生したことであらう。阿弥陀如来は四十八願の中第十八願に、十方の衆

生我を信じ念仏称えれば極楽に往生すると誓約された。衆生と云うのは人間だけではない生物すべてを意味する。ここに人畜共に念仏生活ありと云える。私は病めるクロに背をさすり頭をなでてクロやこんどはよい所に生れておいでよと念仏を称えて聞かせた。人にして念仏の尊さに無関心の人もある。畜生とは云いながら幸に聞名往生が出来れば何たる幸福であらう。浄土教のありがたさを肝銘する。

02 仏凡一体の別時念仏

法然上人の往生浄土用心に導導大師が仏と凡夫と意志相通じて、親しく（親縁）近き場所（近縁）凡夫を守護し給う（増上縁）三縁の中の親縁を解釈された。衆生ほとけを礼すれば仏これをき給う。衆生ほとけとなふれば仏これをき給う。衆生仏を念ずれば仏も衆生を念じ給う。かるがゆへに阿弥陀仏の三業（身口意）と行者の三業とかれこれ一ツになりて、仏も衆生もおや子のごとなるゆえに親縁となつくと候めれば、御手にせずもたせ給いて候はば仏これを御らん候べし、御心に念仏申すぞかしとおほしめし候はば仏も衆生を念じ給うべし。されば仏にみえまい

らせて念ぜられまいらす御身にしてわたらせ給はんずる也。」と云はれた。仏と私等凡夫との交渉で仏凡一体神人合一の様を説かれたので尊いのである。

かかる尊い境地に常にあるのである。

だから一向に専修相続不断念仏が要求されるのである。されば私は別時の念仏を毎月十四日午前九時より夜八時まで一日間のお勤めをして居る。この日いつでも都合のよい時間に参堂、自由に念仏し自由に飯宅する仕組でその時間割は九時—十二時、一時—二時半、三時—五時半、六時—八時で此の間に中食、おやつ夕食は寺より御供養する。会費は不要である。新しい広い本堂で音響の調節よろしきを得て居るので、ありがたく念仏することが出来るのである。右の時間割で木魚を叩き約五万遍の念仏が称えられる。参会者は内外併せて十数名木魚の声近隣に響き渡りありがた環境が造り出される。法然上人の七箇条起請文に、「ときどき別時の念仏を修して心をも身をもはげましととのへすむべき也、日々に六万遍を申せば七万遍となふればとて、ただあるもいはれたる事にてはあれども、

人の心さまはいたく目もなれ耳もなれぬば、いそいそとすすむ心もなく、あけくれ心いそがしき様にてのみ疎略になりゆく也。その心をためなをさん料に、時々別時の念仏はすべき也。」と云はれた。かくて行積んで怠りなければ遂に見仏三昧発得するのである。

又上人の臨終祥瑞記には、吾十余年来念仏の功積り三昧成就して頻りに彼の土（極楽浄土）の仏菩薩及び諸の莊嚴を見ると述べられて居られる。僅か五日や一週間の別時念仏によつて見仏の有難さは、普通人に出来難いと云はねばならない。だが然し我々も十年と誓願して日課六万遍したら、恐くは見仏し奉るであらう。但し是は見る機である。不見の機は臨終来迎に至つて見奉るのではないか。毎日六万遍の念仏は食時睡眠時等を除いて木魚叩いて正味九時間余を要すべく、若し唯珠数つまぐつて申せば九時間弱にて足らんか、朝五時勤行八時朝食以後九時間の念仏は普通現在の寺院生活にては容易でないと思う。私は医師より山地の静養を命ぜられ本年五月末から六月初旬まで四万温泉の閑室で軽うじて念仏に終始することが出来てありがたい事であ

った。法然上人が圓にて念仏された事も偈はれて尊く感ぜられた。上人がかわやにて御念仏ありけるを、ある御弟子いさめ申ければ、不浄にて申念仏のとがあらば

めしこめよかし弥陀の浄土へ

と云はれたと云うが、沢山念仏称えるにはいつでもどこでも念仏してよいのである。若し今の世に法然上人徳本上人(280—1220)の如き念仏三昧発得の方があられたら、如何に念仏門の興隆に寄与するところ大であるか思ふに半ばにすぎないのである。法然上人はこの世ばかり執する人のあわれさを示されて、往生大要抄に「此の世ばかりふかく執する人は、ただまなこのまへのほまれむなしき名をもあげんとおもはんば、いうにたらぬ事にておきつ」と云はれて、眼前の空しき名譽空しき名聞を、言うに値しない事と捨ておきつと云はれた。そして猶次に「うきよをそむきてまことのみにちにおもむきたる人々の中にも、かへりてはかなくよしなき事かなと、おほゆる事もある也」と云はれて名聞をいましめられた。どうかかくありたくないものである。

インドの祖靈祭

春日井真也

(一)

孟蘭盆の行事は云うまでもなくインド起源のものなのであるが、中央アジアを通じてシナに伝えられ、そこから更に日本に伝えられたから、だいふ変形して来ている。

そして一方シナの側でも日本に伝えたあと独自の考え方や習慣によって変形している。

更に本家本元のインドの方はどうかという点、それも長い歴史の波浪のうちに、それ相当の変化をしているものと考えねばならない。

今から二千数百年前に釈迦族の王子ゴータマ・シッダルタが仏陀となられて仏教が成立

したわけであるが、そしてその後不世出の大王安シヨールカ王によって、はじめて全インドが統治せられると同時に、正法による統治が行われたのである。大王の年代としては、西紀前二六八年——二三二年頃の間に在位されたものと考えてよいであろう。

このアシヨールカ王は「一切の国民は朕が子なり」(サウエ・ムニセ・バジャー・ママー)ということを本気で宣言した世界最初の帝王である。彼は世界最初の設備として二種の病院をつくっている。人間の病院(マヌサチキイチヤ)と獣の病院(バシシュチキイチヤ)である。インドではこの様な社会政策は、現在でも残っていて、王舎城などには大きな老牛

病院がある。

またアシヨールカ王は貧しい人々に給与するために「施しの家」(ダーナグリハ)を設立した。

シナでは東晋の時代に仏図澄の感化をうけて、寺院を中心にして施療救済の事業が行われている。仏図澄は西紀三一〇年シナに来た西域の僧であるが、受業の地カシミールの習慣を伝えたものであろう。これが唐代になると制度としてとり上げられ、寺院に附属した養病坊ともなり、悲田院の制も設けられて、貧民救済事業の性格をもった仕事寺院の活動の場となっている。

ヨーロッパに於けるこの様な病人を救う為



の設備や制度は、コンスタンチヌス大帝（西紀三〇六三十七年在位）のときまで開かれていない。パリにある「神の家」がヨーロッパ最古の病院と云われているが、それは西紀第七世紀より後のものであることが注意されねばならない。

またアシヨールカ王は菓草園をつくり井戸を掘り、路傍に樹を植え、正法に基く共生の世界を建設しようとした。アシヨールカ王の法勅によると、当時の主な教団として、仏教とバラモン教とアージュヴィカ教とチャイナ教とを挙げているところから見て、恐らくこの四つの宗教が実際に社会的勢力をもっていたのであろう。

アシヨールカ王は仏教の高僧ウバグブタに帰依したので、仏陀の宗教に対して大きな保護を加えたことは歴史的事実と考えてよい。けれども彼は仏教以外の他の宗教にも保護政策をとったことは事実である。彼の法勅で四つの宗教のトップに仏教をもつて来ていることは、アシヨールカ王が特に仏教を重要視したことを意味している。この詔勅はデリー市に移し建てられている石柱刻文にのみ存在する石

柱法勅等七章に見えている。デリーのガンジス川を火葬した地であるラーシ・ガートを訪ねて帰途、遠く西南に眼を遊ばせると、中空に高く煙突のように先端の折れたこの石柱が立っているのを望見することが出来る。この時代ほど宗教が人間の生活に、希望と尊敬とを以て、かがやきをもたらしした時代はない。

この時代には皆既日蝕が予報せられて居り、また現在と原理的に同じ様な脳外科、眼科、内臓器官に対する外科手術が行われるほどに、科学が進んでいた。それらの科学が宗教と併行して、人間の生活を理性的な基準にものずいた豊かなものとしていた。

(二)

そののち二千二百年の歴史の波浪が、インドの文化を現在の様なものに仕上げたわけである。

さてインドの総人口は一九六一年度の国勢調査人口統計によると四三九・二三五・〇八二人であるが、その中の仏教徒は二十数万人程度の少数人口の宗教であって、総人口比に

すれば〇・〇五パーセントにもならない。チャイナ教は、百六十万人ほどで、総人口比の〇・四五パーセントにすぎない。これらに比べるとヒンズー教即ちアシヨールカ王の法勅に見える言葉で云えばバラモン教は、八五パーセント以上になっている。従って一般的に云って、仏教やチャイナ教に伝わっていたインド起源の古い多くの習慣は、ヒンズー教の習慣の中に還元せられて、現在のインドにのこっているものと考えてよいであろう。

目連尊者が餓鬼道から慈母を救われる話を記した盂蘭盆経は、もとのインドの言葉ではオーランバー・スートラと云ったものであろうと考えられる。このオーランバーという仏教梵語はサンスクリット語になおすとビシャーチャという餓鬼のことなのである。

そしてこのビシャーチャに対しては、ヒンズー教の習慣によれば、祖霊祭のときには必ずビンダという「お握り」をお供えせなければならぬとされる。

ヒンズー教の祖霊祭はバラモン階級では父母の死後十日間を忌服して鬚髪も剃らずに放置するが、十一日目未明から身を浄めてのち

朝十時から午後二時ごろまで、二時間か三時

という。

間ほどの間有徳のバラモンを招いて法会を行つてもらつた後に、共同食事をする。この場合学徳の高い人を招けば祖霊の第七代に至るまで永く満足するという。このことは勿論パンチャ・ヤジュニヤと云われる家長の義務の一部なのである。それはブラフマ・ヤジュニヤというヴェーダの詠唱を含んだ法会と、池に沐浴して両手で水をささげるタルバナという水僧がビトリヤジュニヤ（祖霊祭）であり、第三のデーバ・ヤジュニヤという天神祭

日本の仏教徒の食作法のとき先ず少量の飯をとりわけけることをサバ（撒飯？）といっているが、これにもインド起源のバラモン階級のパンチャヤジュニヤのうちのブータ・ヤジュニヤ即ちブラッタの形式が遺存しているものと考えることが出来る。

はゴマをたくことであり、第四に地上に撒供することはブータ・ヤジュニヤという万霊祭であり、第五はマヌスヤ・ヤジュニヤと云われる賓客款待による人祭である。インドではこの家長の五種の祭事義務を「アフタ・フタ・ブラフタ・ブラーフムヤフタ・ブラーシタ」といつている。アフタというのはヴェーダを低音で誦すること、フタとは焼供のことで天神に捧げる火供、ブラフタとは地上に撒供して三界万靈に捧げる空供、ブラーフムヤフタとはバラモン族に対する款待、ブラーシタとは祖霊に対する日々の水供のことである

クシャとりや階級とバイシヤ階級は十三日目、スードラ階級は一カ月目に法会を行う。このあと一週忌は必らず行わねばならないとされている。

インドは風土的に暑いから死者は死後数時間火葬にしてしまう。このときに葬式をする。従つて祖霊祭は葬式とは性質を異にしている。

またインド人は全部火葬であるかという点に必ずしもそうでないらしい。インドの葬祭儀礼には西紀前二千年という頃インダス河畔で栄えたモヘンジョ・ダロとハラッパの遺跡から見出された頭北仰臥伸展葬以来、いくつかの古い例があつて私には興味ある課題となつていたのであるがまだまだ多くの資料を集めなければ解けない問題をもっている。

日本に火葬が行われたのは西紀七〇〇年僧道照を大和国十市郡栗原に火葬したことが最初のことと云われている。続日本紀、第一、文武天皇四年三月のころには、道照和尚の物化の折のことが記録されている。彼は孝徳天皇の白雉四年（西紀六五三年）五月、第二回の遣唐使に随つて入唐し、そこでインド巡遊を終つて帰国し盛んに経論を翻訳していた玄奘三蔵に愛せられ、親しく経律論を授けられたものを日本に持ちかへつてゐる。

インドにはまた火を尊ぶ拜火主義であるゾロアスター教徒のバルシー族が住んでいる。これの総数はインド内部では六万人ほどであるから、総人口比から云えば〇、〇一パーセントというところである。彼等は火を清浄あるものと見る立場から火葬することを火をけがすものと考え、屍体はドフマという沈黙の塔の中に収めて、禿鷲などの鳥類によつて始末させることにしている。

一寸横道にそれたから話をもとにもどすことにしよう。

先にのべたことは別に、インドでは古い祖先の祖霊祭としては、秋期、例年大体十月に

なるアシュヴィン月の新月の日にプーシャを
行うのである。この日はマハーラヤと云われ
る。インドの陰暦の大晦日にあたる日である。
この新月から七日のちにドウルガ・プーシャ
といわれるお祭りが四日間に行われる。
これはドウルガ女神によって退治せられる水
牛の形をした悪魔を主題とした像をまつるの
である。ドウルガ女神はシバ神の配属神であ
る。

バラモン階級の人たちの共同食事の場合に
は、朋友親族と共にたべられた食物は、本来
は、そのままビシャーチャ鬼に与えられたも
のと云われるのであるけれども、現在では少
しく異って解かれていてバナナの青い葉を適
当に敷いて、その上にアタップという種類の
米を炊いて黒ゴマをまぜて、「握り飯」にし
たものを数個宛、それに副食物は必ず香辛
料なしで料理し調味したものを添えて、施食
のための別席を設ける様になっている。

現代のインドではこの祖霊祭のことは表向
いては語られることはない。

この一月あとに行われる所謂デイワリー
の行事についてののみ記録される。これはサン

スクリット語のデイバースヌヴィタの意味で、
秋のカールティカ月の二日に亘るカリー・プ
ーシャとして、新月の夜間に、沢山の燈火をさ
さげて、祖霊を祭る行事である。カリー女神
も名前が異なるだけで、シバ神の配属である。
この場合でも燈明をつけるという行事に重点
が置かれていて、祖霊を祭るという事は表向
いては語られない。

アショーク王摩崖法勅十四章のうち、第四
章に「アギ・カンダーニ」という言葉が出て
くる。この言葉はすぐあとに「天上の諸々の
すがた」という意味の言葉につらなるのであ
るけれども、「アギ」はサンスクリット語の
「アグニ」即ち火、「カンダーニ」は「スカ
ンダーニ」即ち「諸蘊」・「むらがり」の意
味であって、カールティカ月の新月の夜に行
われる火の祭典のことであると云われている
ことを見ると、この燈火をささげて祖霊を祭
る宗教儀礼は極めて長い伝統をもっているこ
とが判る。

この共同飲食及び燈火供養などの行事をと
もなう祖霊祭は、本来アシア米作地域の農耕
儀礼と深い関係をもつて成立している。

(三)

チベットでもインドと同じようなデイワ
リー祭が、第十の月の第二十五日に行われ
る。それはガ・チョド・トウ・チェンと云わ
れる。ガは二十五日の五のみが残されている
わけなのであるが、「五の日のささげものの
祭日」という様な意味で、この日はチベット
仏教改革の聖者、学僧ツォン・カ・パ（西紀
一三五七—一四一九年）の命日を追慕して盛
大に燈明をささげられる。

ツォン・カ・パはラムリムと云われる菩提
道次第と、ガクリムと云われる秘密道次第と
の二大著作をもって、チベットの仏教の学問
体系を大成して、黄教の祖となり厳格な独身
主義の戒律主義を復興した偉大なる指導者で
あって、西洋にはチベットのルーテルにも比
して紹介せられているのである。

(四)

このようにインドの祖霊祭の系譜をたど
って類似的な宗教行事を見て来たが、益オドリの
インド起源は見出せなかった。これは日本の

独特のもので、本来はおそらく神道習慣の農耕儀礼であつたものが、何かの機会に習合して変化したものであらう。

(a)

明治三十六年一月からインドの現実を見る機会を得た一代の巨匠横山大観画伯は、名作流燈を描いて、明治四十二年の第三回文展に出品している。彼は七月に菱田春草とともに帰朝しているから肝心の本当のデイワリー祭を見たのではなくて、ベナレスなどの聖地で時々行われる行事を見る機会を得て、その印象を描き上げたものである。この「流燈」は巨匠大観の画績に、一時期を劃したものと云われるが、彼のインド文物への深い理解は、今になお他の画家たちの追隨を許さぬものがある。彼がインドの秋深き爽涼のカルルティカ月の闇の中に泛ぶ数千数万の燈火供養の美観を見たならば、如何に感銘したことであらうか。アショーク王法勅に云う、「天上の諸々のすがた」があらわれ、鼓の響が天宮の楽となるというマウリヤ時代の表現が、現実のものとして、巨匠の筆にのりうつったこ

とであらうに。

(b)

インドの暦法は五三二年間で一致することになる太陰太陽週期にもとずいて、太陰太陽暦の混合体なのであるが、今年のインドは一四一年目に起つた閏月の計算の仕方でチャイトラ月をどちらにするかによって、全インドが中央政府の年間カレンダーを、十三省対七省の比率で深刻な対立をつづけている。

もし為政者の任務が東洋的な哲学によれば暦法を決定することに在るとするならば、この対立は極めて大きな意味をもって来ることになるわけである。従つてインドは今や国境問題のみでなく、更に大きな内患をいだくことになっている。

私はこの対立を宗教儀礼の上から見ると稲作文明と、それでないものとの対立とも解し得られるところから、近代インドの脱皮の一時期を現地に於て、見守る機会を得たものと考えている。まこと、インドは私にとっては過去も現在も興味の源泉であり、研究の宝庫である思いがする。

仏心とは大慈悲是なり

無縁の慈を以て諸の衆生を

摂し給う

無縁とは自分のよりどころを求めず、ひたすらに自己の力を他にふりむけることである。

仏の慈悲というものは、このように、己れの中に他を含むという、最大のそして無限の心を意味するものでありましようが、我々の日常生活にも、このようなするどい人間性、即ち仏性といい、如来蔵といわれるものをかかげたいものであります。

互いの生命の尊重こそ、この無縁の慈悲であり、この境地にあつてこそ、自他合一といい、人類といわれるべきものでありましよう。

ここに来てまた、あらたに經典の現代性を考えずにはおれないのであります。

御法語をいただく

浄土の法門をきき、念仏の行をたつとも、信心いまだおこらざらん人は、ただねころに心にかけてつねに思惟し、また三宝にいのり申べきなり。(勸修御伝第十九)

このご法語は、勉強すること、信仰することとは別のことであるということです。つまり師から仏法を聞き、經典についてよく学んだからといって、それで発心したということにならぬと申されました。発心とは発菩提心のことで、上は菩提(仏のさとり)の智慧を求め、下は衆生を教化しようとい心をきめることです。上人はある時、こんな話をされました。

浄土の法門を学び、頭では浄土の教えがどんなものかをすっかり理解できた人がいました。しかしその人は教えの旨は判つても、どうしても信心がおこらなかつたのです。どうしたら信心がおこるだろうと苦心しましたが「三宝に祈請したらよい」と訓えられ、諸国の寺々を訪ねて祈請をはげんでいました。ある日、東大寺に詣つたところ、折から東大寺

は普請中で、大きな棟木をあげるところでした。あんな大きな材木を、どうして高い所にあげるのだろうかと思物していると、ロクロを使用して大木は容易く空につり上げられ、やがて棟にきちんと取りつけられました。

その人は、良匠のはかりごとすら、このように見事に、素人には不可能とみえることを易々と行うことができるのであるからアミダ様の善巧方便がとても人智ではかり知れないのも当然の事であると知りました。こう思うと、今まであれこれ自分の頭で疑い迷つていたことが、霞が晴れたようにスーッと消えてゆきました。その人は、良匠の仕事とみている内に信心ができたので、これこそ日頃三宝に祈請していたおかげであります。

こう語られた上人は、更にこうつけ加えられました。

「受教と発心とは各別なるゆへに、習学するには発心せざれども、境界の機を見て信心をおこしけるなり」

境界の縁とは、めぐり合せのことです。誰も毎日雑多なことにめぐり合せているわけでもない、偶然の連続のように見えますが、実は何れも

因果の理により、各人それぞれ決つた毎日を通してしているのです。浄土の法門をすっかり学び、しかも三宝に祈請をこらしていたからこそ、その人は東大寺の棟あげに出逢いもし良匠の方便をみて信心をおこしたのでです。ニュートンは林が樹から落ちたのをみて、万有引力を発見し、ガリレオは釣ランブの揺れるのをみて、振り子の方則を考えたといいますが、何れも「境界の縁」にすぎません。

このご法語を逆に申せば、浄土の法門をきき、念仏の行をおこしたからといって、簡単に信心がおこるとは限らぬということです。学問をしたからといって信心がおこると限らぬように、学問をしないからといって、信心が起らぬと限りません。智者の念仏と愚者の念仏とは、何らの区別がありません。道心のあるなし、慈悲のあるなし、その他人間的差別と信心とは直接の関係がありません。学問をしたり善行を積めば、直ちに信心がおこるなり信仰とは簡単なことといわねばなりません。「先づ名号を唱えよ。名号の徳として妄念自ら止み、願心自ら生ずる也」であります。

パータリの木蔭にて

—インドのあの町この村(1)—

佐藤良純

(大正大学講師)

パटना、それがインドの古い都パータリプトラの今日の名前です。悠久なガンジス河は、この町の北側をゆっくりと流れて行きます。一日に数回この流れを横切って、連絡船が対岸のダルパンガと云う地方を結びます。この連絡船は、アメリカのミシシッピ川を上下していた様な一本煙突で両舷に二つの水車をもった、ダブル・デックのもので、二階は一等で、ガラスばりの窓の内には、クッションのある椅子がおかれています。一階の三等は、長い木の椅子だけの吹きさらしで、夏はともかく、冬には、最夜中の便など寒くて毛布を身体にまきつけるほです。ここでのガンジス河は広く、流れを

斜めに横切って対岸まで一時間はかかります。

現在のパटना市は、ビハール州の首都であり、古のま、東西に細長くガンジス河にそってのびています。上流側がカントウンメントと呼ばれる新しい町で、州政府の諸機関が点在し、下流側は、シティと呼ばれる曲りくねった路をもつ古い街です。市の中央には大広場があり、ずいタクシーの運転手は、右へ行くのに左から大廻りして、倍以上の運賃をかせいだりします。町中には、一七八六年(江戸の天明六年)、飢饉にそなえるために作られた、オワン型の倉庫があります。三〇メートルもあるてっぺんまで、小馬で登ったと云うネパールの貴族の話もあります。が、ラセン状の階段を登って頂上から四方を見ると、パटना市全体が一望の下に開け、タタレには、西の方、ガンジスの上流に沈む大きな太陽を受けて、あちこちから登る炊事の煙が、ほのかなダイダイ色に照らされて見えます。

この町の名前、パータリプトラの起源については、ロマンティックな物語が伝えられています。大体、パータリと云うのは、セイロン、東インドに多い木の一つで、プトラは子の意味ですので、玄奘三蔵は、旅行記、大唐西域記にパタリ子城、又、漢訳經典には華氏城とか華子城と記されているわけです。

西歴七世紀にここを訪れた玄奘の聞いた町の由来は、こんなものでした。

この地方に一人の学生がおりました。長年の間、勉学にはげみましたが、進歩ははかばかしくなく、憂いに沈んだ日々を送っております。そこで友人達は、たわむれに結婚することをすすめ、或る二人を学生の父母に見たて、他の二人を女の父母に見たて、パターリの木の根元に婚姻の式の坐を設け、儀式のまねごとを行います。やがて女の仮の父は、この木の一枝を学生に授け、これが花嫁であると告げ、君はよい配偶を得たと云うと、学生は大いに喜び、日が暮れても、家に帰ろうとしません。友人達は、今までのことはたわむれで、附近には猛獣が居て夜は危険だといいますが、学生は聞き入れず、一人、木の下に残ります。日もとっぷりくれ、夜半になると、一人の老人が少女をつれて現われ、これが学生の妻であると告げ、娘をおいて立ち去ります。七日の後、友人の学生達が森に来てみると、木は家や棲をなし、人々は繁く往来しているので驚きます。この学生と木の精なる女の間に出来た子の町と云うので、以後、ここをパターリプトラと呼ぶ様になったと云うのです。

インドの古い民話集、カタールサリットサーガラ（物語の

大洋）にも、この町の由来に関するものがあります。

昔、南インド生れのブラフミンで、プトラカと云う若者がおりました。若くして一度は王の位に登りますが親類の権力あらそいにあいそをつかし、深い山に退いてさまよい歩くうち、偶然のことから魔法の容器と、棒と、空を飛ぶことの出来る靴を手に入れます。その後プトラカは、パターリと云う名の姫と恋におち、毎晩、空飛ぶ靴をはいて王宮に忍びこみますが、遂にみつかつてしまいます。そこでパターリ姫をひそかにつれ出したプトラカは、空飛ぶ靴をはいて、姫を抱いて空中へ逃れそのまま空を飛んで行きます。所がガンジス河の岸に来ると、姫がまったく疲れしてしまったので、プトラカは魔法の容器からお菓子を出して姫に与え元気をつけます。更にここに棒で町の図を書きますと、それがそのまま実際の町になり、プトラカは王、パターリ姫は王妃となって周辺を治めたので、二人の名前をとってこの町をパターリプトラと呼ぶ様になったと云うのです。

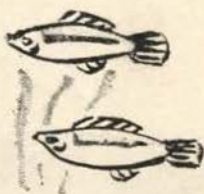
この二つの話は、大変にロマンティックなのですが、仏教と同時代に起ったジャイナ教と云う宗教の文献のうち、ずっと後代（12世紀）に出来た、パリシシュタパルバンと云う書物に記されたこの町の起源は一寸、異ったもの

です。

昔、ジャイナ教の聖者が、残酷な王のために死刑にされてうめられ、その頭の骨にパターリの木の実が落ちて根を下しました。丁度この時分、或る王が都を新しく築くことを考え、占者を四方へつかわして適当な土地をさがさせておりました。占者はガンジス河の岸に、上記のパターリの木を見つけ、よく見ると木には鳥がとまっていて、口をあけるたびに色々な虫が自然にその中へ入って行きます。これを見た占者は、帰って王に、もしかの土地に都を造れば、かの鳥の様に周囲の国々は自然に帰属するにちがいないと告げます。そこで、ウダーイと呼ばれるこの王は、ここに都を築いたと云うのです。このウダーイと云う王が実在したらしいことは、他の文献からも知られますが、築都の理由などは、まず、後世の創作であろうと云われています。これら伝説のうち、始めのものは、樹神とか木の精に關係したものです。インドでは古くから樹神信仰のあったことが知られており、仏教の開祖仏陀が苦行の後、河の流れに身を清めて木の下に坐っていた時、村の娘が乳を供養したと云うのも、娘が樹神と思って供えたものであると云う解釈もあります。更に、インド美術、特に彫刻のなかに、木の下に立つヤクシニー(バルフート、マトゥラ出土)

などがあり、エローラには樹神(七世紀)の像、東インド、オリッサのコナラクにも、樹神が数多くみられます。現代のインドでも、木の根元に石をおき、花や香をささげてあるのを筆者は何度も見えていますので、この伝説ももっともなことと云わずにやめます。

第二の伝説も、魔法の棒とか空飛ぶ靴と云ったモティーフが西欧の伝説、物語と共通で、その関連性を主張する学者もおります。



雜 感

日本ほど車の事故の多い国はないようだが、結局、問題は人間性にあると思う。

先日タクシーに乗ったら、運転手が、「むかしは犬が車道でひかれたりすれば、ともかく死骸を片づけたものですが、この頃じゃ、片づけるスキもないで、たちまち毛皮になってしまいますよ」という。まったくそうである。これでは、「犬も歩けば棒にあたる」というイロハがるたは、「犬もあるけば毛皮にされる」と直さなければならぬだろう。

戦後の日本人は、いのちを尊ばなくなったとよくいわれるが、命の一つや二つは、道に出てきたらひき殺すのがあたりまえ位に考えているようだ。現にこの間も、トラックの運転手が子供をひき殺してつかまったが、「人の一人や二人ひき殺して何がわるい」といったと新聞に出ていた。もちろんトラックの運転手ばかりではない。自家用車族にもこんなのが沢山いるのである。驚くべきことになったものだ。

この頃の街の中は、「上を向いて歩こうよ」じゃないが、上を向いて歩かなければ、建築中のビルから、何か落ちてこないともかぎらない。前後左右上下を見て歩かないと、地下鉄工事の穴にまで落ちてしまう。この頃の日本は何かがどうかしているといわざるを得ない。

おそらくそれは戦争中アメリカを物質文明の国で精神を欠いた文化などと軍部が宣伝していたということの反動であろう。大いに軽蔑することになっていたアメリカに、徹底的に打ち負かされたために、戦後はアメリカの物質文明だけを真似することになってしまったのであろう。しかも実力もないのに、レジャー・ブーム、消費のデラックス化をやるのだから、国際収入がもたなくなるのは当然である。

むかしから日本は外国崇拝だったが、むかしは大体外国の精神文化を取り入れていた。ところが敗戦で精神力の意義がゼロになったかのような考え違いをして、哲学や、世界視を喪失してしまったのである。戦後の日本の文明、あるいは高い生活水準といわれる日常

生活の中には、人間形成の精神がなくなつて

しまった。交通事故のよつて来るところもこの点にある。所得倍増計画も大いに結構だが、精神再建計画もこれと併行させなければ、結局経済政策は正しい軌道に乗り得ない

理想 社 刊

ガブリエル・マルセル著

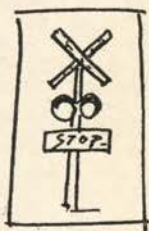
峯 島 旭 雄 訳

存在の神秘——序説

価 二八〇円

申込先・東京都豊島区西巢鴨四丁目
大正大学哲学研究室

心の鬼



昔、インドのサンダーラ国に、一団の旅役者がいた。村々、町々で芝居をしながら、諸方を流し歩いてた。

或る村までやって来たところが、大変な不入りで、すっかり閉口してしまった。村人は気の毒に思つて、村から山越しに行けば大きな町があつて、そこの人々はみな裕福で、きっと芝居も好きだろうから、是非、その町で興業をするようにと教えてやつた。

旅役者は喜んで、早速出発の仕度にかかったところ、別の村人がやつて来て、山むこうの町へ行くのはよいが、途中の山の中に、近頃鬼が出るのとことだから、用心して行くようにと注意した。

これをきいて、役者達は、そんなおそろしい山を越すのをやめて、別の町へ行こうかと相談したが、しかし、みすみす大入りの見込みのある山むこうの町を諦めるのも残念な

ので、勇を鼓して、出かけることにした。旅の準備に手間どつて、出発の時刻が悪かったために、山中で日がくれてしまった。やむを得ず、野宿をすることになり、鬼の来ぬようにと、大きな焚火をして、交替で一人ずつ起きて番をすることにした。

夜も段々ふけて来ると、山気も急に冷えて来て、不寝番の男も寒くなつて来たので、何か着るものはないかと、芝居の衣装の入った箱から、手さぐりで衣類をとり出して、それをかぶつて、火にあたっているうちに、どうやら体も暖まつて来たのか、急に眠気がさして来て、ついウトウトと居眠りを始めてしまった。

ところが、その男が手さぐりで引張り出して着たのが、あろうことか、鬼の衣装だったので、ねている一人が、ふと目をさましてみると、焚火のそばに、一匹の鬼がいるのをみ

西洋の幽霊

日本のゆうれいには、女が多い。日本ではつい最近まで、男尊女卑で、女性がいいたげられていたため、それだけ、この世へのうらみやみれんが男より多かったからだろう。これからは、きつと、日本にも男のゆうれいの数もますことであろう、その点、西洋では、幽霊の世界も、男女同権らしい。ハムレットに出て来る、父王をはじめ、男のゆうれいが可成りいる。中には、夫婦で仲よく出て来るゆうれいが、アイルランドの田舎にはいるそうである。まったく、うらやましい次第である。

それから、もう一つ。西洋のゆうれいには足がある。日本でも、ぼたんどうろうに出て来るお露は、カランコロンと下駄をはいていたらしいが、そのほかには、足のあるゆうれいは余りない。西洋では、元気に、靴音高くあらわれてくるがある。ポーの小説に出て来るゆうれ

つけて、大いにおどろいて、「さてはいよいよ鬼が出た」とばかり、あわてふためいて、ほかのねている連中を叩きおこして、一目散に逃げ出した。

その騒がしさに、鬼の服を着ていた男も目をさますと、何がか分らぬが、みんなが顔色を変えてにげて行くので、置いて行かれては大変とばかり、皆の後から、夢中になってかけ出した。先に逃げ出した連中は、自分達の後から、鬼が恐い勢いで追って来るので、益々恐怖にかられて、道のないところを夢中になってかけ出す。やぶも、いばらもおかまなしで、かけにかけたのである。後からついて行った鬼の服の男も、むやみやたらに、皆の後について、いばらや、やぶをかけぬけて行ったが、その内に、着ている鬼の服がいばらに引かかって段々にぬげて、もとの姿にかえった。前を逃げていた連中の一人がふとふりむくと、鬼はいつの間になくなって仲間の一人が、一生懸命、かけて来るのがみえた。やっと鬼からのがれることが出来たと思つて、仲間にも声をかけて、一同手をとり合つて喜んだ。

疑心悪鬼を生ず。人は往々にして、自分の心に描いたことに、われ知らずあざむかれ、あらぬ騒ぎをするものである。

(百喻経より)

人の心というものは、さながら水に映る月影のようなものである。波のない、鏡のような水面ならば、円い月はそのままだい姿に映されるが、波立った水面では、その波の状態に応じて、ある時は楕円形にも、三角形にも、そして時には千々に離れて、ほとんどあるか、なきかさえあきらかでないようにみえる。

皎々と照り映える月そのものには、円いまままで何の変化もないのに。

人の心もその通り、こちらが明鏡止水、何のこだわりもないときには、相手のことが円いままに素直に受け取れるけれども、こちらの心が波立っていると、月影の乱れと同じことで、相手の言葉や行いが、乱れて映ったり、歪んでみえたり、尖つても感じられたりするものだ。問題は相手より、こちらの心次第ともいえる。

いなど、その代表だと思ふ。日本のゆうれいには何故足がないか。これは「日本のゆうれい」の担当者にまかせて、西洋のゆうれいに、足のあるわけはなぜだろう。

西洋人の信仰では、死んだ者は、長い旅をして、遠いあの世に行くという。旅をするには、どおしても足が必要、というわけである。ドイツには、百五十年程前まで、死んだ者は、永い旅路の末、蛇の橋を渡って死者の国へ行くと思われていた。ジョン・パンヤンにしても、デントの神曲にしても、みんな、永いつらい旅路のちに、死の国に行きつくのである。ゆうれいには、旅客飛行機や高級車はないとみえる。

鬼に角、日本のゆうれいが、若い女のようなよとしたのにくらべて、実に現実的に、堂々としているのが、西洋のゆうれいの特長らしい。西洋のものの考え方、感じ方が、そうであるように、めそめそなどしていないらしい。

一枚起請について(一)

聖典講義

題名は自然に生れた

村 瀬 秀 雄

一、一枚起請文の意義

一枚起請文は、お念仏を唱えるものにとつての奥義書といふべきものであります。普通に極意とか奥伝とかいえば、長い間の修行を積んだ者にしか判らないし、役に立たないものですが、お念仏を申す者には一枚起請文があれば、それだけで十分なのです。

一枚起請文は、宗祖法然上人の御自筆だけあって気品が高く、力のこもった文章ですが、それにもまして文章が短いことが第一の特色であります。文章が簡単で誰にも読み易いということですから。後になって、俳諧の一枚起請文とか商売の一枚起請文とか渡世一枚起請文とかいって、文の口調、字句の配置をそのままにまねたものが作られたことでも、いかに一

般に流布され、かつ尊信されていたかが判ります。

第二の特色は、文こそ短かいが、その意味するところは、法然上人のご生涯にわたる御教旨がすっかり収まっていることです。古人の言葉に、「開けば選択本願念仏集」、「その文近くしてその旨遠し」又は「誰かいう一枚の紙と、中に含む大藏經」等と申されていますが、その通りです。的門上人はこういっています。

船に乗るには、誰でも一枚の道板を渡ります。老若貴賤を問わず、各々は一枚の板を脇目もふらず、大切に歩み渡るから船に乗れるのです。ここで渡船とは弥陀の本願のこと、一枚の道板とは一枚起請文のこと、下の海とは生死の苦海のこと、もし脇見をしたりして坂を踏みはずせば、その者は直ちに苦海におちて救われることがあります。



第三の特色は、後世に至るまで多くの人々を救つて下さる役次に割をはたしていることです。ここにこうした一枚起請文があり、日日読誦できることは、まことに有難いことと申さねばなりません。

さて、長年に亘つて上人に仕えていた勢観房源智が、上人のご病勢をみていよいよ終焉の期が近づいたと知り、ある日のこと「念仏の安心について年来御教誡にあずかりました、な御自筆で肝要の御所存を一筆お書き下さいましたなら、後世のお形見にそなえたいと存じます」

と上人に懇請されました。源智にしてみれば懐しい上人のご最期というばかりでなく、門人の幾人かがしきりと邪義をたて、地方ばかりでなく京都においてさえ、日増に勢力を伸してきていることに心を悩ましていたので、かくは病床におしとお願ひしたわけです。

上人は直ちに筆をとられて一枚起請文を認められました、それが、それと申すのも、源智の懇請があつたればこそであります。このことを法洲上人は

「元祖大師の御慈悲と、勢観上人の御慈悲と、師資偶合の御慈悲より発る」

と申されています。さて、源智は上人御自筆の書を頸にかけて秘藏し、誰にも見せようとしませんでした、川合の法

眼が是非にと懇願しましたので、初めて法眼に見せたところ、それから世間に広く流布されたといわれています。

二、一枚起請文の原本

日常勤行式等にあり、現に読誦されている一枚起請文の原本は黒谷金戒光明寺に伝わるものであります。尚この外にも百万遍知恩寺と京極誓願寺にも本書といわれるものが蔵されています。いま黒谷本を原文のまま記せば次の通りであります。ただ最初に源空述の三字があり、「学問」が「学文」となっている点を除けば、現在のものと全く同じであります。

一枚起請文

源空述

もろこし我がてうにもろもろの智者達のさたし申さるる観念の念ニモ非ズ、又学文をして念の心を悟りて申念仏ニモ非ズ、ただ往生極楽のタメニハ南無阿弥陀仏と申て疑なく往生スルゾト思トリテ申外ニハ別ノ子さい候はず、但三心四修と申事ノ候ハ皆決定して南無阿弥陀仏にて往生スルゾト思フ内ニ籠り候也、此外におくふき事を存ゼバ二尊ノあはれみニハツレ本願にもれ候べし、念仏を信ゼン人ハたとひ一代ノ法ヲ能々学ストモ、一文不知ノ愚どんの身ニナシテ、尼入道ノ無チノともがらに同して、ちシヤノふるまひヲせずして、只一かうに念仏すべし、

為証以両手印

浄土宗の安心起行此一紙ニ至極せり、源空が所存此外ニ全ク別義を存せず、滅後ノ邪義ヲふせがが為メニ所存を記し畢、

建暦二年正月二十三日

源空花押

この原本をみて第一に不審に思うのは、題名の下に「源空述」の三字があることで、もし上人御自筆のものなら、自ら源空述とはお記しになる筈がありません。これはこの原本が誰かが写したときに書き添えたものか、又は原本に後から書き加えたものかの二通りがあることになりました。しかしここで黒谷本を詮議する必要はありませんが、恐らくは一枚起請文と呼ばれるものは源空上人が述べたものであると、まず標題を書き、ついで本文を写したのだと思います。

勅修御伝には一枚起請文の文字はなく「もろこし我朝」から「一向に念仏すべし」までを記し、これこそ御自筆であり、「上人の一枚消息」として世に流布されているとあります。参考のために黒谷本との相異なる点を挙げると次の通りであります。

黒谷の原本

勅修御伝の文

もろこし我がてうにもろもろの
又学文をして念の心を

但三心四修と申事ノ

ただし三心四修など申ことの

一代の法を能々学ストモ

一代の法をよくよく学せりと

只一かうに念仏すべし

一向に念仏すべし

も

このように多少の字句の相違がありますが何れも根本的な意味に影響がありません。

さて、この原本で、古くから問題となっているのは、第一に「一枚起請文」なる題名がいつ頃からつけられたかということです。第二には「為証以両手印」以下の奥書に相当する文字がいつ頃から又どうして付け加えられたかということです。従って当然のことに、上人御自筆の日が「建暦二年正月二十三日」であったのかどうか。またどうしてこの日ときめることになったのかという点が問題となります。

三、一枚起請文の題名

一枚起請文と申すわけは、この文がわずか一枚の紙にお認めになった短い文章であるから一枚といい、また本文中に上人自らが阿弥陀如来と釈尊との前にお誓いになっておられるから起請文といひます。もともと起請文とは誓いの文章という事です。何にでも用いられたわけですが、たとえば太閤といえは秀吉のこと、花見といえは桜見物のことに決っているようなもので、一枚起請文といえは宗祖上人の御遺訓のことを指すことになっています。しかも誰に誓ったものでなく、二尊の仏さまに誓われたものという点に特別の意味があります。よく拝誦するときに、その上に「円光大師御遺訓」の七字を添えますが、これは信受の意を深くするために行うものに外なりません。

勅修御伝には、この文が「上人御消息」と呼ばれて、一般に流布されているとあって、一枚起請文の文字はありません。それでいて、御伝の他のところには起請文なる言葉がいくつあるし、上人自らも他の文章について起請の字をご使用になっています。即ち御伝二十九は幸西の一念義を記しています。その中で「上人、一念義停止の起請文を定めらる」とあり、同三十一は専修念仏停止の件が述べられています。

が、その中で「件起請文云」とか、また「座主に進ぜらる起請文云」とかの文字があり、上人の誓文中には「先年沙汰の時起請を進畢」ともあります。

このように起請文なる文字は御伝中に見られるにも拘らず、御遺訓に対しては別の名を以て呼んでいるのは、御伝編纂当時にはまだ一枚起請文と呼ばれることがなく一枚消息といわれていたからであります。

それより後に聖岡上人（一三四一—一四二〇）が一枚起請之註を著され、聖聰上人（一三六六—一四四〇）が一枚起請見聞を公けにされましたが、ここにおいて初めて一枚起請なる名が出現したわけであり。また忍激上人（一六四五—一七一）は自らの著作には「吉水遺誓諺論」と名づけたが、これも「古より世人相伝へて一枚起請文とは名けるなり」といわれているのでその時分には、すでに今の題名が一般化されていたことが判ります。

それなら何故、一枚消息と呼ばれていたものが一枚起請文と名が変わったのでしょうか。それはこの御遺訓に対して一枚消息とか御誓言の書とか申すより、一枚起請文と呼ぶ方が適切だったから自然にそうなったものです。これは当然のことだといえはそれだけのことですが、それなら何故適切だったかを知らねばなりません。

この文の一字一句は何れも同じ貴重さを持つもので、どこが重点だとか大切だとかいう区別はありません。しかし静かに拝誦している時に、

「此外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし」

の一句に目をとめるなら、そこに上人の普々ならぬ激烈な御信念のあることに気がついて胸打たれる思いがするのであります。法洲上人は、この一句に対して「御詞やわらかに御心はげしく、一大事の後世に浮沈をかけて誓い玉える起請文にて、是れ大師徹底無極の大慈大悲なるなり」といっています。が、古来先徳たちも同じ思いであったのでしょうか。上人のこの思い切ったお誓いには、実に身の毛もよだつといった感じ、この実感の繰り返しから誰いうとなく、ごく自然の内に一枚起請文なる題名が生れてきたものです。そして遂には、一枚起請文といえ、それは直ちに法然上人の御遺訓のことだと誰でも思うようになりました。

二尊というのは阿弥陀さまと釈尊のことです。善導大師は玄義分において釈尊のことを娑婆の化主といい、広く浄土の要門を開かれたとされています。また阿弥陀さまを安楽の能人といい、一切の善惡の凡夫を浄土に生ぜしめているといっています。即ち釈尊はこの土から弥陀の浄土に往くよ

う衆生に勧め、阿弥陀さまは衆生のために彼の国から来迎し給うと説かれています。また宗祖上人は十二箇条問答の中で「弥陀を念ぜよといふ事、釈迦一代の教にあまねくすめ給へり。その中へは阿弥陀仏本願をおこして、わが名号を念ぜんもの、わが浄土にむまれずば、正覺をとらじとちかひて、すでに正覺をとり給ふゆへにこの名号をとなふるものは、かならず往生する也」と申されています。釈尊と阿弥陀さまは、このような仏さまなのであります。特に釈尊については、善導大師のお示しになったような釈尊なのであります。つまり同じく釈尊と申しても、出山の釈迦でもなく、また樺定の釈迦のことでもありません。阿弥陀さまが本願をたたられ、どんな罪深い者でも、お念仏を申せば必ず救って下さることを御教示になった釈尊であり、迷える人々に対してお念仏により浄土に往生するようお勧めになっている釈尊のことをいっているのです。このような釈尊と阿弥陀さまのあわれみにはずれ、本願によつて救われぬものだと言われているという事は、この上ない起請と申さなくてはなりません。「一枚起請文」の題名が自然と生れ、しかも起請文の代表のように思われたことはもっともだといふべきであります。



編集後記

▽八月盆は特に地方の特色ある季節感を想わせるものがある。

七月号では特集として、地獄、極楽を取り上げて見ましたが、今月号も引き続き、林先生にお願ひしました。ここであらためて浄土仏国土の真実さを感得させていただくのであります。

▽暑さがますます厳しくなってくると、我々の心身は寒さを欲しくなるのも、人間なるが故の欲望でありましょう。

我々は相対する二つのものを受け入れるということは、相当難行であるらしい。

▽世間の忙々とした様は、年々に色濃く示してくるようだ。それが為か、人は、ただ忙しさの中に自己を忘れがちとなり、人命の日夜に去ることも知らずにいるのも、人間の欲望をかきたてる声聞根情であるらしい。然し乍ら、今一度、この強健有力のうちに、自策自勵して、自己の真実を求めよ、という普導和尚の言葉を想ひ合せ、お盆にちなみ、仏、仏国土のありがたき存在に合掌させて頂くのであります。

▽先月号で、インドのお盆について原稿をいただきました春日井先生に、八月盆の為に、少し趣向を変え、インドの祖霊祭についてご執筆を頂きました。

炎暑の候を迎え、愛読者皆様方の御健勝をお祈り申し上げます。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 八月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十八年七月廿五日 印刷

昭和三十八年八月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

会社

東京都千代田区飯田町一ノ二二

発行所 法然上人顕仰会

電話東京三三二一局五九四四番

振替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

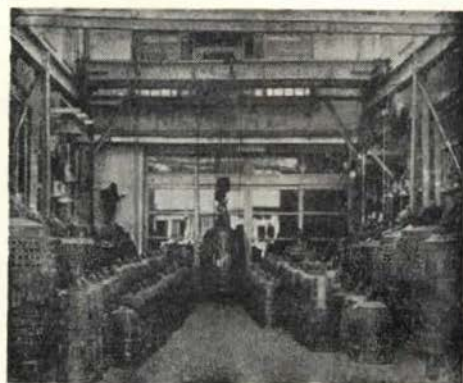
梵鐘 (4cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響理學博士青木一郎先生

梵鐘界の權威 日展 藝術院賞受賞 香取正彦先生



鑄物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇円
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番